

宜野座村漢那方言の助詞

野原, 三義

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

10

(開始ページ / Start Page)

56

(終了ページ / End Page)

75

(発行年 / Year)

1986-03-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012652>

宜野座村漢那方言の助詞

野 原 三 義

漢那は沖縄本島のほぼ中央辺の太平洋岸に面した集落である。この方言は、沖縄北部方言に属するが、p音があまり無いとか、k音がh音化しないとかがいった南部方言に近いところもある。一方グロタルストップがあまり顕著でないとか、音声の脱落現象が目立つという独自の特徴もあるようである。

本方言の助詞調査は1985年8月8日から16日にかけて行った。話者は生え抜きの仲本ツネさん（1903年2月4日生れ）である。

I 格助詞

I-1, ga

(a) 主格に立つ場合

ʔamma:ga idʒi ku:ri itaŋ
母さんが 行って来いと 言っていた
taro:ga su:suja muru jana fi:kata reu:
太郎がするのは いつも 悪い仕方 だよ
natʃibusaga ʔndʒititʃo:ti ʔo:ɛ: tʃi: tʃanna:
泣き虫が 出ておって 喧嘩して 来たか
magittʃuga tattʃo:taŋ
大きい人が 立っていた
magi:ga nato:taŋ
大きいのが なっていた
ja:ga ju:suja jukuʃimunui: reu:
お前が言うのは うそ だろう
wi:ja mutʃikasanu wa:gaja najaj
それは 難しくて 私がは 出来ない
wa:ga makatʃi tʃaŋ

私が 負かして 来た

(b) 連体格の場合

kamadu:ga finuja ʔansuka sa:san ja:
カマドウーの着物は とても 美しいね
kamade:ga saku kanato:ʃija waŋ
カマデーの くらい 出来る のは いない
kamada:ga sa:dʒi カマデーの 手拭
makatuga kʔwa: マカトウーの 子
taro:ga uja 太郎の 親
mittʃaiga utʃika: ta:ga jatanten tuteŋ jo:
三人のうちから 誰かが 取っただろう
ju:tʃuga mi:ja ʔa: hadzu
四つの 一杯は ある はず
ti:suga ʔuttu ʃi:dʒa
一歳の 弟 兄 (一歳違いの兄弟)
ʔaiga na:kake: ʔittʃo:ŋ
あれの 中に入っている
wi:ga na:kake:ru ʔittʃo:ja sanni
その 中にご 入っているだろう
dʒuiga na:kajo: どれの 中か
ʔaiga finu: あれの 着物
ʔaiga muŋ あれの 物
ʔaiga ʔujaja kunume:ka: bjo:kiru jenri:
彼の 親は この前から 病気ぞ であると
<たったそれだけの> というような意味の場合
çakuengga mu: ko:tanri ʔitʃo:ŋ
百円の 物 買ったと 言っている

同種の名詞に挟まれる場合

me:ga me:ni^tfi 毎が 毎日
 muru^{ga} muru 全部が 全部
 tfa:ga tfa: いつもが いつも

(c) 動作の目標

?asubi^{ga} iki^g 遊びに 行く
 midzu kumi^{ga} ikanna:
 水 汲みに 行かんか

hatakigati mmu Φ uiga reu
 畑へ いも 掘りに だ

I - 2, nu

1, 連体修飾

(a) 所有・所属

ki:nu ha: 木の 葉
 na:binu suku 鍋の 底
 ci:nu na:ka 火の 中
 ja:nu kufi: 家の うしろ
 ja:dunu sag 戸の 棧
 tataminu butfi: 畳の へり
 me:nu mirtunda 前の 夫婦
 ketunainu t^{fu} 隣の 人
 kertunainu usume: 隣の じいさん

(b) 状態

kut^{finu} mi: 口の 一杯
 wi: wi:nu t^{fu} 上上の 人
 su:d^{zinu} ka:d^{zi} 祝の たびごと
 su:d^{zinu} gutuni 祝の たんびに

(c) 名詞 + nu + 複数の接尾語で複数を表す

ru^{fin} t^{fa} 友の 達 (友達)
 (d) <~という> ほどの意

hendzanu ^{fima}: 平安座の島
 (e) 詠嘆的

kinu:nu ne:nu ?utusatanu muja:
 昨日の地震の 恐ろしかったことよ

kannanu mu:nu ma:satasujo:

漢那の いもの おいしかったことよ
 (f) nu の前後の単語の内容が同じ

wa: ?ujanu ?ufi:garu t^{fa}
 私 親の ウシーがぞ した

du^{finu} kami:ga i:tag
 友の カミーが 言った

(g) ~の後は

nuimunu t^{fi}:nu atoja so:d^{zin} fi:waru jau
 縫い物 しての 後は 掃除も しないとい
 けない

saki nudinu atoja ?ore: t^{fo}:g
 酒 飲んでの 後は 喧嘩 している

tamug watinu ?atoja nu: suggaja:
 薪 割っての 後は 何 するかね

(h) 姓や代名詞について <の家の (者)>
 という意を表す。

si^{mabukunu} sanna^g 鳥袋の 三男

?aija ci^{ganu} jant^{fu}ru je:kaja
 あれは 比嘉の 家の かな

?amanuru je:kaja 向うのぞ であるかな
 (i) 歳に関する語について <~の時の>
 という意を表す

?ikutsu nainu ba:nu kwa: jingga
 幾つ なる 時の 子 であるか

nid^{gu}:nu kwa: renro:
 二十の 子 だよ

(j) 地名やそれを尋ねる語について出身
 を表す。<~の出身の> の意

?an t^{fu}ja dan t^{fu} jenggaja:
 あの人は どの人 かな

nagon t^{fu}ru jekkaja:
 名護の人ぞ であるかな

un^{nan} t^{fu} 恩納の 人
 ginudzan t^{fu} 宜野座の 人

(c) の *n* も同様であるが、上記のように *nu* は *n* に弱まることがある。

(k) *nu* を中心に同語を繰り返し 〈~のある限り、すべての~〉ほどの意

ja:nu ja: kadzu:

家の 家 数 (すべての家)

(1) 〈~のような〉ほどの意

jutfinu guturu a:ssa

雪の ようで あるよ

(m) 〈~だから〉ほどの意

natfinu tfu:nu ?amijannanija kurasajaj

夏の 人の 浴みないと 暮らせない

fitfibu tfu:nu judan tfi:ja najannanija

neni

節日の 人の 油断 しては いけないのではないか

(n) 〈~と同じくらいの〉ほどの意

ja:nu ntaki tfosa

家の 丈しているよ

2. 連用修飾

主語や対象を示す

watanu jari: 腹が 痛い

habunu ug ハブが いる

tudzinu su:g 妻が 来る

mununu ni:g 物が 煮える

subanu tfu:nu kumainro:

側の 人が 困まる

fijo:nu dzo:dzu jessa:

しょうが 上手 だなあ

rampatfija:nu kwa:nu çisa u:tanri:

散髪屋の 子が 足 折ったって

〈~のくせに〉ほどの意

inagununtfon naitoti (?)ikiganu najannaça:

女がさえ 出来るのに 男が 出来やがらないか

wa:binu munu fiki rukkwasanu

子供が もの 聞きたがる

I - 3, *ke*

(a) 目標・場所

suike ?atanu hanafi:

首里に あった 話

?amake maja:nu ug 向うに 猫が いる

gamake su:rog 洞穴に 住んでいる

hatakike ?o:ha witeg

畑に 野菜 植えてある

ma:ke ?i:wa そこに 坐れ

da:ken nemu kuturu jenro:

どこにも ない ことぞ であるよ

?amakeg kumaken dziko: mandiru u:

向こうにもここにも 随分 沢山ぞ ある

(b) 状態

mitfike nintosa: 道に 寝ているよ

mitfike ninto:tag 道に 寝ていた

(c) 対象

Φunike nuig 船に 乗る

mi:ke mimbe: ndzito:g

目に ものもらい 出ている

Φunike 〈船に〉は, *ke*, *gati* どちらを用いてもよい。(a) の *suike* 〈首里に〉の場合は *gati* はよくないとのことである。

I - 4, *gati*

(a) 目標・場所

na:hagati ?ikisa: 那覇へ 行くよ

jamatu:gati ikiç ヤマトへ 行く

na:kugati ikitag 宮古へ 行きよった

fitfigwatsu so:gwatfija ja:gati muduti ku:jo:

盆 正月は 家に 戻って 来いよ

figutugati idçag 仕事に 行った

ha:magati ?asubiga ?ikimi:

浜へ 遊びに 行くか

?amagati nagijug 向うに 投げる

da:gati jegga どこへ か

(b) 到達点

ginodzasog ginodzagati ikig

宜野座村 宜野座へ 行く

(c) 対象

Φunigati nuig 船に 乗る

ki:gati nubuinu sakuja naisa:

木に 登る くらいは 出来るよ

(d) 比較の基準

wana jaja gakkogati fikasag

私達 家は 学校に 近い

(e) 方法

mit:fugati wakkig 三つに 分ける

I - 6, ti

場所

wana jati ku:jo: 私達 家に 来いよ

?i: rati jegga 君ら どこへ か

ti は gati の ga の脱落したものと思われる。

I - 7, ni

(a) 対象

ja:ni na:susa: お前に 習わすよ

tju:ni jat:fag 人に やった

he:ku su:suni jajsusa:

早く 来るのに やるよ

?anu sakunu mu:nim ma:kinna:

あの 位の 者にも 負けるか

(b) 動作主を示す

pu:me:ni ?abijai ɲjo:

じいさんに 怒られるよ

su:ni sugujattag 父に 殴られた

?innuk?wa:ni ku:jattag 犬に かまれた

(c) 比較の基準

kunu kwa:ja ujani nitfo:ɲ

この 子は 親に 似ている

k?wa:niɲ wakaintɲi na:fiwa

子供にも 分かるように 教えろ

(d) 時・場合

rokudzini ?ukitassa: 六時に 起きたよ

ja:ninu saggwatsunija me:bitfi sug

来年の 三月には 結婚 する

I - 8, ka, ka:

(a) 空間・時間の出発点

?amaka su:suja to: jeggaja:

向うから 来るのは 誰 かな

?asaka bammari hatarakisa:

朝から 晩まで 働くよ

?asaka: sawadzo:sa: 朝から騒いでいるよ

?atoka su:ku satfi nato:kiwa

後から 来るから 先 なんておけ

tusu: nati nejka nu: naigga

年寄ってから 何 出来るか

he:kuka 早くから

to:kuka 遠くから

ku:sanu ba:ka 小さい 時から

(b) 物事の順序の初め

ji:finnika kweg 肉の方から 食べる

satfo:suka tuti k?wa:

咲いているのから 取って 来い

(c) 手段・方法。〈を利用して〉の意

jamatugatija nu:ka jegga

ヤマトへは 何から か

Φunikaru jenro: 船からぞ であるよ

(d) 動作が行われていることの確認

ha:me: mat:fika attfo:tag

ばあさん 町から 歩いていた

pu:me: ha:maka attfo:tag

じいさん 浜から 歩いていた

(e) ~の部分から

ji:fija ?anranu ?an tukuka: ko:ijo:

肉は 油の ある 所から 買えよ
 (f) ~を経由して, ~を通して
 da:kaga ʔidgi sumija wakʔajag
 どこからが行ってよいのか 分からない
 本助詞の ka は, 他方言例えば那覇方言の
 kara の ra が脱落した形である。

I-8, na:ri:

(a) ~を経由して, ~を通して
 tʃinna:ri: ʔiʃitʃa: ʔidgitʃag
 金武経由で 石川 行って来た

(b) ~の中を

ti:ranari: ʔakkinija ka:dzu jaminro:
 太陽から 歩くと 頭痛いぞ

I-9, toti

動作が行われる時間・場所
 nintonu bartoti ʔidgi wantag
 寝ている 内に行って いなかった
 mitʃitoti itʃetaḡ 道で 会った

I-10, ttʃi, ttʃi:, tʃi

(a) 手段・材料・行為者などを表す
 dakittʃi me:ʃi tʃukuri:wa 竹で 箸 作れ
 mudʒikuttʃi: ʔanda:gi: tʃukuriwa
 小麦粉で てんぶら 作れ
 kwittʃi wakaitag 声で 分かりよった
 Φudittʃi dʒi: katʃuḡ 筆で 字 書く
 sakija kumittʃiru sukoju:
 酒は 米でぞ 作る
 sa:taja u:dʒittʃiru sukoju:
 砂糖は きびでぞ 作る
 jambarusentʃi tamunu muttʃi tʃanro:
 山原船で 薪 持って 来たぞ

(b) 動作の行われる場合の状態

nifeta: muruttʃi: ʔatʃimati udui na:tossa:
 青年達 皆で 集まって 踊習っているよ
 muruttʃi ʔo:je: tʃi: tʃag

皆で 喧嘩 して 来た
 (c) 期限・限度・範囲などを表す

ʔunu ja:ja tʃusutʃittʃi sukutanro:
 その 家は 一カ月で 作ったぞ
 misutʃittʃija nai ʔjo: 三月では 出来るよ

I-11, dʒi

動作が行われる場所を示す
 ʔamadʒiru ʔatʃimaiḡ 向うでぞ 集まる
 muraja:dʒiru ʔatʃimainrinro:
 村屋 (役場) でぞ 集まるそうだよ
 da:dʒiga ʔasudo:ja

どこで 遊んでいるのだろうか

I-12, jo:kag, jokag, joka

(a) 比較の基準

ʃidʒajoka ʔuttugaru ju: di:ki:ssa
 兄より 弟がぞ よく できるよ
 ʃi:ʃijo:kag ju:ja takasassa:
 肉より 魚は 高いよ
 kwi:jo:kag ʔaija Φurumunu jassa:

これより あれは 古る物 だよ
 Φujujo:kan natsuja mafi jeḡ
 冬より 夏は ました

(b) 否定の語句と呼応し, それ以外にな
 いことをいう

ja:joka Φukakeja to:ḡ waḡ.
 君より 外には 誰も いない
 ʔaijoka magisasuja to:ḡ waḡ
 あれより 大きいのは 誰も いない
 wanujokag Φukakeja naiʃija waḡ
 私より 外には 出来るのは いない

I-13, tu

(a) 相手・共同者

taru:tu me:bitʃi tʃag 太郎と 結婚 した
 kamade:tu ʔo:e: tʃag
 カマデーと 喧嘩 した

dufitu [?]idʒag 友と 行った

ja:tuja najag お前とは 出来ない

(b) 比較の対象

mukafituja tintu dʒi: tunu sa:nu [?]asaja

昔とは 天と 地との 差が あるね

[?]uʒutʒu natoti wa:bitu [?]o:ʒ: tʒi:

大人になっていて 子供と 喧嘩 して

(c) 並列

[?]itatuga:tatu [?]asasa: かまきりと 蟬

na:bitu hagama 鍋と 釜

ʒunitu ka:tu nato:sa: 骨と皮となっている

fʒitu ju:tu nu: ma:ʒi jegga

肉と 魚と 何 ましであるか

mi:ha:ki k[?]we:sutu ju:bag k[?]we:sutu nu:

朝食 食うのと 夕食 食うのと 何

ma:ʒi jegga

ましであるか

(d) 反復形について強調を表す

kata gata: tu ʒ 濃 濃と

(e) tu ma:ʒuna で 〈~するとすぐ〉の意

tʒij ke:ʒisutu ma:ʒuna ju:tuʒi su:ʒaja:

着物 替えるとすぐ 汚して 来るか

ここに助詞を用いない例をまとめておく。助詞を略したり、必要としない該当個所には下線を引いて示す。

(a) 主格のnu 〈が〉を略す場合

ka:ʒu ʒ jadi nintiru utaru

頭 痛くて 寝てぞ いた

ʒudu ʒ magisag 丈 高い

wata: ʒ jari: 腹 痛い

ti: ʒ da:ʒanu 手 だるくて

habu ʒ ug ハブ いる

(b) 所有・所属のnu 〈の〉を必要としない場合

ta: ʒ kwa: jegga: 誰 子 であるか

wa: ʒ mu renro: 私 物 だぞ

wa: ʒ muru jeu 私 物ぞ である

wa: ʒ hog 私 本

wa: ʒ ja: 私 家

ja: ʒ gusanu お前 杖

(c) 目的格の〈を〉に当たる形がない場合。沖縄方言には、この助詞は存しない。

jama ʒ da:ʒkwi miguti [?]asuri tʒag

山 どこもかも 廻って 遊んで 来た

sa: ʒ sumiti ku: 顔 洗って 来よう

tʒa: ʒ numiwa 茶 飲め

tʒa: ʒ numanna: 茶 飲まないか

tabaku: ʒ ʒukiwa: 煙草 吹け (吸え)

wa:ʒtotin na:da ʒ ututʒag

笑っていても 涙 落とした

me:ʒi ʒ sukoig 箸 作る

wa: ʒ sa: ʒ mambifikitag

私 (の) 顔 見つめていた

wa: ʒ sa: ʒ mi: mi: sutag

私 (の) 顔 見 見 していた

(d) 〈に〉に当たる形がない場合

kusa:nu ba: ʒ sugujatti

小さい 時 殴られて

sa:ʒi ʒ nato:ʒwa 先 になっておけ

II 係助詞

II-1, ga 〈疑問〉

(a) 疑問語に結びつくか、呼応する

(a) -1, 直接つく

nuga:ʒo: unna kutu su:

何かよ そんな 事 する

(a) -2, 疑問語の次に、動詞・助詞などを介したり、文中で呼応する

da: jegga どこ であるか

nu: jagga 何 であるか

nu: tʃogga: 何 しているか
 ʔikutsu naiŋga 幾つ なるか
 ʔitsu jɛgga いつ であるか
 itʃa jɛgga どう であるか
 to: jɛgga 誰 であるか
 to: jɛgga 誰 であるか
 ʔitʃasa jɛgga: いくら であるか
 dʒui jɛgga どれ であるか
 ta: kwa: jɛgga: 誰の 子か
 ta: jan tʃu: jɛgga 誰の 子か
 da:ka: iŋga どこから 行くか
 da:gati jɛgga どこへ か
 darti jɛgga どこへ か
 tʃassabuke sugga いくらぐらい するか
 nu:ritʃi wa:bintʃa nakasugga
 どうして 子供ら 泣かすか
 ja: nu: kagge:tonga:
 お前 何 考えているか

(b) 係結

kamada:ga jɛtʃa
 カマダーだっただろうか
 tabigatiga idʒaɟa uwaŋ
 旅へ 行ったのか いない
 dʒi: ga katʃo:ja: 字を 書いているのか
 tagaga sa:saja: 誰が 美しいだろうか
 da:dʒiga ʔasudo:ja どこで遊んでいるのか
 da:kega kakutʃe:ja mi:nim ma:jaŋ
 どこに隠してあるのか 目にも見えない
 係助詞 ga と呼応するのは活用語の末尾が
 ja(:) の形をとる。これは他の方言、例えば那
 覇方言の係助詞 ga の結びの形 jataɾa,
 ʔndʒara, katʃo:ra, tʃurasara, ʔaʃiro:ra,
 kwakkwatʃe:ra の末尾の ra が ja(:) に変化し
 たものである。従って、漢那方言の係助詞
 ga の結びは活用語の -ja(:) 形ということに

なる。

II-2, ru <強調>

(a) 係結。活用語の末尾に u を伴った形と呼応する。この u は他方言の ru の変化した形である。

dʒi:ru kakiu 字ぞ 書いている
 ja:garu tʃeu お前がぞ してある
 ɟi:saru ʔaibju: 寒さぞ あります
 nagogatiru jeu 名護へぞ である
 nimbisuru maʃi jeu 寝るのぞ ました
 pi:dʒaɟa kusanu wa:ru maʃi jeu
 山羊は 臭いから 豚ぞ ました
 ja:keru u:temu 家にぞ 居ている
 nama:ru idʒau 今ぞ いてある
 ninto:tig ʔatija ʔairu su:
 寝ていても あては ありぞ する
 wito:tig ja:nu sakuja wakairu su:
 酔っていても家のくらは分かりぞする
 sakiru numiu 酒ぞ 飲んでいる

ʔasurintʃaru u:, nu: n ʃigutu sag
 遊んでばかりぞいる何も 仕事 しない
 次は結びの形の末尾が o: である。これも係
 結の一種と思われる。音韻変化のつごう上、
 上記のような ru→u がとれないのかもしれない。

kusagaru mito: 草がぞ 生えている
 kusanuru mito: 草のぞ 生えている
 dʒi:ru katʃo: 字ぞ 書いている
 tʃa: mu:ru kwato:

いつも いもぞ 食っている
 jana mununtʃaru nukuto:
 悪い 物ばかりぞ 残っている

(b) 陳述との呼応

dʒi:ru katʃo:kaja: 字ぞ 書いているかな
 kamada:ru jɛtakaja:

カマダーぞであったかな

kaggetiru ukkaja: 考えてぞ いるかな

dzi:ru katjonna: 字ぞ 書いているのか

tʃa:ru nuronna: 茶ぞ 飲んでいるのか

ʔaigaru dʒa:he: sunro:

あれがぞ 狼藉 するよ

tsukaiʃiru janro:, fiti:ʃija ʔajanro:

使うのぞであるよ 捨てるのは あらぬよ

ʔaigaru sasaŋあれがぞ 美しい

ja:keru u:ŋ 家にぞ いる

II - 3, ja

(a) - 1, 主題を表す

udʒija ʔamasan 砂糖きびは 甘い

ʃigutuja he:ku ʔuwatŋ

仕事は 早く 終わった

Φuduja magisanu nu:n najan

丈は 大きくて 何も 出来ない

çittʃi:ja hatarakijo:san

一日中は 働ききれない

ja:ja sakko: kanasassa:

お前は とても 愛しいよ

他の場合と区別し、特にそれを取り上げて提示する。限定のような働き。

tʃa: tisuja numatʃi ta:sanna:

茶 一つは 飲まして くれんか

(a) - 2, 対比的な文の中で両方の主題を表す

çiruja ʔatsusamu juruja sudasamu

昼は 暑いし 夜は 涼しい

na:be:ra:ja ma:samu go:ja:ja ndzasan

糸瓜は おいしいが 苦瓜は 苦い

ja:saja ʔa:wa: ka:dzuja jamiwa tʃan najan

空腹はであるし 頭は 痛いし どうにもならない

(b) 卑下する語について卑しめの意を表

す

jana wa:bija, da:dʒiga ʔasudo:ja tʃikaŋ ku:-

悪い 子供は、どこで遊んでいるのか 来や

nsa:

がらぬよ

(c) jo:ka nja~maʃi という構文で用いられ後者がよいことを示す

ko:isujo:ka nja sukuisuru maʃi jeu

買うのよりは 作るのぞ ました

ʔinnu: jo:ka nja majaru maʃi jeu

犬よりは 猫ぞ ました

ja maʃi という構文でも、この方がよいことをいう

kwe:suja maʃi 食うのは よい

(d) <~の中の> ほどの意

nagoja da: jingga 名護は どこか

(e) 文末に否定や疑問の意を伴って <~では> の意味を表す

ʔai kamada:ja ʔajanna

やあ カマダーは あらぬか

ʔunu Φu:dʒi tʃi su nja najanna:

そのように して 損は あらぬか

tʃantʃaja ʔajansa munuŋ kwa:ti ikiwa

茶だけはあらぬよ、物も 食って 行け

(f) 疑問語につく場合

dʒuija ja: muŋ jingga

どれは 君 物 か

da:ja su:ki jingga

どこは 惣慶 であるか

(g) 格助詞 ga, nu につく場合

ʔja:gaja najan お前がは できない

ʔaigaja naisa あれがは できるよ

ʔinunuja kwatim maja:nuja kwag

犬のは 咬んでも 猫のは 咬まん

係助詞 ja の融合現象は、漢那方言において

以下のように起こらない。

kabija nenna: 紙は ないか
 sitfibija nenna: 帯は ないか
 namaja kunna: 今は 来ないか
 sitfaja magisanu 舌は 大きくて
 ʔuppaja ʃio:sanna: おんぶは 出来ないか
 ʃi:guja nenna: 小刀は ないか
 Φujuja ʃi:sanu 冬は 寒くて
 gadzamuja jumugaʃimasag 蚊は かしまし
 い
 ʃinuja takasanu 着物は 高くて
 kwija magisa:nu 声は 大きくて
 tanaga:ja mandonna: えびは 多いか
 ʃi:mu:ja ma:sag 肝は おいしい

II - 4, n

(a) 事情の類似したことがらを暗示する

su:ja su:n ʃigutugati idzag
 父は 今日も 仕事へ 行った
 tuʃi tu:ti ka:dʒuŋ haɡiti
 歳 取って 頭も 禿げて
 tuʃi: juti kuʃim maɡati
 歳 取って 腰も 曲がって
 (b) 事物の類似した事物・事柄の提示
 go:jan nabe:ra:n nato:nro:
 苦瓜も 糸瓜も なっているよ
 idzigi ʔikantin sumiru su:
 行っても行かなくても よい
 ka:dʒuŋ jamiwa wataŋ jamiwa tʃa:n najag
 頭も 痛いし 腹も 痛いしどうも出来ない
 tʃiŋkwa:n ʃibuin de:kuniŋ ʔassa:
 南瓜も 冬瓜も 大根も あるよ
 ʔattʃiŋ ʔattʃin sukag
 歩いても 歩いても 着かない
 innum majag ka:toŋ
 犬も 猫も 飼っている

(c) 事情の類似したものを繰り返して強調する

kwat:tiŋ kwat:in naritʃe: neŋ
 食べても食べても よいといっている
 nu:keŋ kwi:keŋ nakisa, natʃibusu:
 何にもかにも 泣くよ、泣き虫
 dʒo:ŋ Φukan ndzijaŋsa
 門も 外も 出ないよ

(d) 極端な場合を提示する。〈～さえも〉ほどの意

ja:n nagainu gutunu ʔu:ami jata:sa:
 家も 流らす ような 大雨 だったよ
 ʔatʃisa:ja ʔa:wa kadz:in tuiti
 暑さは あれば 風も 凪れて

(e) 疑問語に関係して全面肯定・全面否定を表す

ʔikusanu kutuja ta:gaŋ wakairu su:
 戦の ことは 誰がも 分かりぞ する
 kajasusuja tʃassa je:tantiŋ ʔa:mu:, ja:susuja
 貸らすのは いくらでも あるよ やるの
 neŋ
 は ない
 da:ja kwi:ja tumetamu da:keŋ wantaŋ
 あち こち 探したのにどこにも居なかった
 ja:ke:ja to:ŋ wannataŋ
 家には 誰も いなかった

(f) 格助詞の ga, nu について全面否定などに係わる

ja:gaŋ wakainna:ʃa:
 お前がも 分かりやがるか
 ta:gaŋ najag 誰がも 出来ない
 innugaŋ wa:iga:ja: 犬がも 笑うかな
 kamade:ga sakuja ta:gaŋ hatarakijo:sag
 カマデーの程は 誰がも 働ききれない
 kusanuŋ kwa:inna 草のも 食えるか

ha:nug jaminna: 歯のも 痛いか

II-5, ntʃon

ある事象を普通でないこととして例示し、普通であることを暗示する

inagununtʃon naito:ti ikiganu najanritʃij
女さえ 出来るのに 男が 出来ないといっ
ʔa:mi:

て あるか

ja:gantʃon naitoti wa:ga: najanritʃin ʔanna
君がさえ出来るのに私が出来ないといっ
てあるか

wa:gantʃon wakaimunu

私がさえ 分かるのに

kakisuntʃon nenna:

書くのさえ ないのか

tukantʃon utokija sa:nu

十日さえ 居っけばよいものを

ʔittʃintʃon ne:nna 一斤さえ ないのか

II-6, nron, ron, run <強調>

kwinrog ʔwi:kafinija jurusanro:

これこそ 動かすと ゆるさんぞ

sakinron numinija jamatʃiriro:

酒こそ 飲むと 困るぞ

ʔaiganron ʃi:nija redʒi:

あれがこそ すると 大変

tuisurom mi:nija kataijo:

取るのこそ 見たら 合図せよ

ʔikirun ʃi:nija wakaisa:

行きこそ すれば 分かるよ

II-7, ten <〜としても>

ʔo:je: tʃanteg ʔansukamadija nikkwi:

喧嘩したとしてもそんなにまでは 恨みを持

mutaggu:tujja:

たないようにね

ʃi: ammasatanten sannanija najag

しにくくても しなといけない

mo:kitanten tarama sukati nennaig

儲けたとしても只今 使って なくなる

tʃanteg waj 来たとしても いない

jaranten nidziwa 痛くても 我慢せよ

III 副助詞

III-1, gure: <動作の程度を示す>

anenu mu:nija ta:figure:ja ajag

あんな 奴には 取らす程では ない

ta:sunu gure:ja naisa

取らすのぐらいは 出来るよ

III-2, nagara <にもかかわらず>

ʔitʃimufinagara so: manrog

動物ながら しっかりしている

III-3, ntʃa, ntʃa:

(a) 事象が頻繁であること。<しょっちゅう。いつも> のような意味

ni:butantʃa ndʒitossa: 根太ばかり 出ているよ

ʃittʃi tʃantʃa nurossa:

頻繁に茶ばかり 飲んでるよ

ʔasurintʃa uinija ʔurimun nainro:

遊んでばかり居ると 馬鹿 なるぞ

ru:nu numusuntʃa itti wa: muja ʔi:ʃansa:

自分の飲むのばかり入れて 私の物は入れないよ

natsu natakʔu: go:ja: naberantʃaru kʔwe: u:

夏 なったから 苦瓜 糸瓜ばかりぞ 食べている

pu:me:ja sakintʃaru tʃa:gi u

じいさんは 酒ばかりぞ 召し上がっている

(b) 当該のことに限定する。<〜だけ> のような意味

jana mununtʃaru nukuto:

悪い 物だけぞ 残っている

kumantʃaja ajanu ʔi: hatan tʃotanna:
 ここだけは あらぬ 君ら所も 来ていたか
 go:rantʃa: ʔajansa 苦瓜だけでは ないよ

Ⅲ-4, buke:, baka

(a) 数量を表す語について、大体の分量・
 程度を表す

sambjattʃibuke: kakainu wa: jentanrinro:
 三百斤くらい かかる 豚 だったというよ
 tuʃi: godʒu:buke: jeta hadzuro:
 歳 五十くらい だったはずよ

juttaibuke: jentanro:

四人くらい だったよ

juttaibuke:ru jeta hadzu

四人くらいぞ だった はず

tʃassa

baka
buke:

 sugga 幾らくらい するか

ʔato tʃassabuke: nukutogga:

あと どのくらい 残っているか

(b) 事柄が直ちに行われることを示す

tumeibuke: ʔajanro:

探すばかりも ないよ

Ⅲ-5, madi

(a) 動作や事柄の到達点を表す

maruʃi:dʒija godʒimadiru hatarakju

普通は 五時までぞ 働く

ʔa:tʃamadija mattʃo(:)iwa

明日までは 待っておれ

ʔitsumadim mattʃotig kunsu:

いつまでも 待っていても 来ないよ

(b) 極端な場合をあげて強調し、他の場
 合を言外に暗示する

mitʃi akkisumadin ti: no:nri:

道 歩くのまでも 殴るそうだよ

(c) 程度の極端な場合

ʔuttunimadin nakasaisaja:

弟にまでも 泣かされるよ

ʔikusa ju:ja nu:madiɡ kwatag

いくさ 世は 何までも 食った

(d) ~ka(:)~madi という範囲を示す構

文の場合

kumaka: ʔamamadi ʔakkig

ここから 向うまで 歩く

ʔasaka: bammadig hatarakig

朝から 晩までも 働く

次の nu:ka nu:madi は 〈ことごとく〉 のよう
 な意味

nu:ka nu:madiɡ muttʃi ndge: sa

何から 何までも 持って 行ってある

(e) ~wa ~madi という構文の場合。

kakiwa katʃamadi re:suga

書けば 書いたまで だが

ʔikiwa idʒamadi re:suga

行けば 行ったまで ぞであるが

Ⅲ-6, na:, na

数や分量を表す語について、等量の事物が配
 分されることを示す

ʔikutsuna: ʔataigga, mi:tsuna: ʔataisa:

幾つずつ 当たるか、三つずつ 当たるよ

tamakaina: kwa:tim matag ʔi:jasusa:

二回ずつ 食っても 又も 入れさすよ

mi:tsubukenaja ʔataikaja:

三つばかりずつは 当たるかな

(b) ある動作が等量の動作として反復さ

れることを表す

tʃassanna: mutinija utainro:

沢山ずつ 持つと 疲れるぞ

ʔiçina: ʔiçina: mutiwa

少しずつ 少しずつ 持つ

ʔiçina:ja kaggeti ta:ʃi:

少しずつは 考えて くれ

Ⅲ-7, ɡgweša

(a) 漢然と表現する

ʔaigaggwesa dʒo:ɪ sa ɲjo:

あれがなど まず しないよ

nu:ŋ kwesungwesa nengaja:

何も 食うのなど ないかな

tuggwe:ngwesa muttʃi dati jenga

鉄など 持って どこへ であるか

(b) 強調

sakingwesa numinija jamatʃirinro:

酒をこそ 飲むと 困ったことになるぞ

IV 終助詞

IV-1, kkaja:, kaja:, kaja <軽い疑問>

dʒi:ru katʃo:kaja: 字ぞ 書いているかな

kaggetiru ukkaja: 考えてぞ いるかな

wa: mu rekkaja: 私の 物 かな

mitsubukenaja ʔataikaja:

三つばかりずつは 当たるかな

ʔamanuru je:kaja 向うのぞ であるかな

IV-2, gaja:, gaja <軽い疑問>

su:dʒinu barja nu: ʃitʃi ʔikingaja:

祝儀の時には 何 着て 行くかな

taga sa:sanggaja 誰が 美しいかな

tamuj watinu ʔatoja nu: sungaja:

薪 割っての 後は 何 するかな

je:gaja: ʔajanggaja:

であるかな でないかな

漢那方言には末尾を上げる疑問法もある。

je: taŋ <である> の末尾を上げて je: taŋ^h のよ

うにすれば <であるか> ということになる。

IVの1の kaja: グループと2の gaja: グルー

プは異形態と見ることが出来よう。

IV-3, sani, sanni <強い推量>

tʃassa ʔurimun nato:tig ʔujaja wakajesani

いくら狂れて いても 親は分かるだろう

wi:ga na:kakeru ʔittʃo:jasanni

それが 中にぞ 入っているだろう

IV-4, ssa:, ssa, sa:, sa 念押し, 主張。

<~しているよ>

nifesta: muruttʃi: ʔatʃimati udui natossa:

青年達 皆で 集まって 踊 習っているよ

ʔamaka: tʃunu su:ssa:

向うから 人が 来るよ

ja:ni ja:sa: お前に やるよ

ʔuinija ʔnri:sa: 降ると 濡れるよ

ma:tʃuŋ gadzimarun tʃassam mito:ssa:

松も ガジマルも 沢山 生えているよ

ʔamija ʔujansa 雨は 降らないよ

tuʃi juti ka:dʒuŋ hagito:sa

歳寄って 頭も 禿げているよ

ʔi:nu wata ja:sa 入る 腹 だよ

nu:ka nu:madim muttʃi ndʒe:sa

何から何までも 持って 行ってあるよ

jutʃinu guturu a:ssa

雪の ように あるよ

na:hagati ʔikisa: 那覇へ 行くよ

minnaka tʃe:saja: 早くから 来たね

IV-5, su: 念押し

ʔamaka: su:su: 向うから 来るよ

IV-6, na:, na

(a) 疑問

dʒi:ru katʃonna: 字ぞ 書いているか

kamada: renna: カマダー であるか

go:ja: na:tonna: 苦瓜 なっているか

ʔainim makinna: あれにも 負けるか

(b) 反語

ʔuʔutʃu natoti wa:bitu ʔo:e: tʃanna:

大人になっていて子供と 喧嘩 したか

ʔai tʃui nukutʃi ja:nu ba:nu suminna:

あれ一人残して 家の 番 させるか

ja:ga ʔiki o:sunna, dʒiko to:sanro:

君が 行ききれるか 大変 遠いぞ

(c) 勧誘

nagogati ?ikanna: 名護へ 行かんか

IV-7, ni 婉曲な主張。〈～ないか〉

fitfibu:nu tʃu:nu judan tʃi:ja najannanija

節日の 人の 油断しては いけないのでは

ne: ni

ないか

he:ku tʃikag ?ukwijanni ?asanintʃa fi:kwa-

早く 起きやがらないか 朝寝ばかり しゃ

tiça:

がって

IV-8, ça: 相手をさげすむ。軽蔑

sakintʃa nuriça: 酒ばかり 飲みやがって

he:ku tʃikag ?ukwijanni ?asanintʃa fi:

早く 起きやがらないか 朝寝ばかり しゃ

kwatiça:

がって

ja:gag wakainna:ça:

お前がも 分かりやがるか

相手にものをすすめるときにも ça:を用いる
から、時に親愛の意にも転じるようである。

IV-9, mi: 疑問

inagununtʃon naito:ti ikiganu najanritʃig ?a:

女がさえ 出来るのに 男が 出来ないと

mi:

いっても あるか

ha:magati ?asubiga ?ikimi:

浜へ 遊びに 行くか

IV-10, muç 不満な気持

?içina:ja kançeti ta:ʃiwa je:muç

少しは 考えて 取らせば よいのに

IV-11, ja:, ja 軽い感嘆

fittʃoti ?aniri ?i:saja:

知っていて ああ 言うよ

?uppena: mum muttʃi tʃe:saja:

巨大な 物 持って 来たね

çi:duʃi jassa:ja: 寒年 ですね

ka:gin sa:sawa takiʃudug ?utʃatʃi ju:

顔も 美しいし 丈程も つり合って 良く

mmaitosaja:

生まれているね

?aiç kwij ?itʃunasauja:

あれもこれも 忙しくてね

?antʃi çi:sauja: かくも 寒いよ

çi:sabju:ja: 寒うございますね

kunu k?wa:ja ?ujani ?antʃi nitʃo:ja:

この 子は 親に かくも 似ているよ

munu na: ni:tontoja: 物 もう 煮えているよ

IV-12, jo: 疑問

dzuiga na:kajo: どれが 中か

IV-13, jo: 念押し

ja: rippani ?akkijo:

お前 立派に 行いなさいよ

tʃu:nu ʃi:nija e:dzu ʃijo:

人の 来たら 合図 せよ

tuisu mi:nija kataijo:

取るの 見たら 語れよ

IV-14, ri:, ri 引用

?unu ja:ja tʃusutʃittʃi sukutanri:

その 家は 一か月で 作ったって

mitʃi akkisumadin ti: no:niri:

道 歩くのまでも 手 出すって

?ikinri ?itʃi mitʃai ?ikanri ?itʃi mitʃai su:tag

行くと 言ってみたり 行かんと 言ってみたりし
ていた

?amma:ga idçi ku:ri itag

母さんが 行って 来いと言っていた

fittʃoti ?aniri ?i:saja:

知っていて ああと 言うよ

ʔitʃa:gatiri itʃi mitʃai nagogatiri itʃi mitʃai
石川へと言ってみたり 名護へと言ってみた
su:tag

り していた

IV-15, ro:, do: 強意

muraja:dʒiru ʔatʃimainro: 役場で 集まる
ぞ

tsukaiʃiru janro:, fiti:ʃija ʔajanro:

使うのぞであるよ 捨てるのではないぞ

wa: mu renro: 私の物 であるぞ

nihe:e:bitanro: ありがとうございましたよ

tumeinu sako: ʔajanro:

探す 程でも ないぞ

nabera:n tʃiburun na:tonro:

糸瓜も ふくべも なっているよ

gammari ʃi:nija atoja o:e: naindo:ja:

悪戯 すると 後は 喧嘩 なるぞ

munu na: ni:tondo:

物 もう 煮えているよ

多くは ro(:) であるが do: も現れる。あるいは ro(:) が本来のもので, do: は他方言の影響かもしれない。ただし, この方言の r で示したのものには, r から r と d の中間のような音までを含んでいる。

V 接続助詞

V-1, ga 並列

çi:sa umi:ga atsusa kaʃimasasa:

寒さがりやで 暑さ ぎらい

V-2, gitina:, gitina

動作が並行して行われることを表す

munu kwe:gitina hanaʃintʃa tʃi:

もの 食いながら 話ばかり して

ʔakkigitina: tumetaŋ 歩きながら 拾った

V-3, ku:, ku

(a) 原因・理由

su:ku mattʃoiwa 来るから 待っておれ

çi:saku: ikanna hadʒu:

寒いから 行かない はず

wa:ga suku: utʃo:kiwa

私が するから 置いておけ

ja:ga suku: wanuja sag

お前が するから 私は しない

ʔuʃuttʃu re:ku: uʃuku sumiwa

大人 だから 多く させろ

(b) 逆接の確定条件

ha:e:su:bu: tʃa:ku: tusu:ni makiti

走り勝負 したから 年寄に 負けて

mmu: ʔittʃiga uja:ri mi:taku ittʃi wannataŋ

いも 入っていると思ったら 入っていなかった

ku(:) は他方言の kutu の末尾の tu が脱落した形である。

V-4, suga:, suga

(a) 並列

kwetosuga iru ʃirusanuja:

肥えていて 色 白いね

(b) 文末用法

ma:ke ʔa:suga: ここに あるが

to:ŋ wansuga: 誰も いないが

この助詞は他方言では逆接条件としてよく使われるが, 漢那方言では活力がないようである。

V-5, toti, toti 逆接条件。のに

inagununtʃon naitoti ikiganu najannaça:

女がさえ出来るのに 男が出来やがらぬか

inagununtʃon naitoti ikiganu najanritʃiŋ ʔa:

女がさえ出来るのに 男が出来ないといって

mi:

あるか

ja:gantʃon naitoti wa:ga najanritʃiŋ ʔanna

お前がさえ出来るのに 私が出来ないといっ
て あるか

V-6, nija 仮定条件

hananu sakinija ja:susa:

花が 咲いたら やるよ

atfa: su:nija ja:susa:

明日 来たら やるよ

kwe:nija ma:sag 食うと おいしい

nakinija mitfa:sag 泣くと うるさい

?ufikinija fi: ndzig おし切ると 血 出る

ru:ttfi sukojaginija nu:g kwim manri

自分で 作れば 何もかも 沢山ある

tfa:bunne: su:nija utati jonna(:)ru mafji jeu

とても 急ぐと 疲れてゆっくりが良い

V-7, ne:, ne

(a) 仮定条件

ja:ga ikine: naimuja:

君が 行くと 出来るがな

taro: suguine: tada gattin sanro:

太郎 殴ると 只 合点 しないぞ

(b) 前提の条件

k?wanig wakaintfi na:fiwa

子供にも分かるようにして 習わせ

(6)の nija と(7)の ne(:) はほぼ同意である。

nija が ne: のようにもなるということか。し

かし、係助詞 ja が融合しないことなどから

考えると、他方言の影響のようにも思われる。

V-8, mu:, mu

逆接条件, けれども, のに

ci:saja ?a:mu: wi:giga ika:

寒さは あるが 泳ぎに 行こう

?ikibusaja ?artamu ikantag

行きたくはあったが 行かなかった

?mbusaja ?artamu muttfi tfaj

重くは あったが 持って 来た

he:ku ni:buttfejisamu: atfiran ni:jag

早く 煮えそうだが なかなか煮えない

ha:naja satfutamu mi:ja najanatag

花は 咲いたが 実は ならなかった

sakija su:mu tfij uti nukusag

咲きは するが 折って 残さない

kwe:busaja artamu kwannatag

食いたくは あったが 食わなかった

?ikimu jedzuntfon sansa:

行くが 合図も しないよ

文末用法

ja: nu: kaggetonga: <君なに考えているか>

という問に対して wan nu:g kaggeti wa: mu:

<私なにも考えていないのに> のように用い

られる mu: は終助詞のようにも見えるが、

接続助詞 mu:の文末用法と見てよい。

V-9, munu 逆接条件

kadzi ?ukimunu figutu janna:

風 吹くの に 仕事 か

ansuka takasamunu kosisu u(:)tanna:

かくも 高いのに 買う人 いたか

8の mu(:) と同じ意味である。普通には mu(:)

を用いるが、たまに munu が出てくる。

munu の形が本来の形なのかはよく分からない。

V-10, wa 並列

sakim ma:sawa ju:m masag

酒も おいしいし 魚も おいしい

figutun fi:wa begkjo:n sug

仕事も するし 勉強も する

?amig ?uiwa kadzig ?ukiwa de:dzi jassana:

雨も 降るし 風も 吹くし 大事だよ

次の「ば」「て」の結合したものは各活用形

の条件形, 接続形である。

条件形

?ikiwa wakaisa: 行けば 分かるよ

?atʃisaja ?a:wa kadʒin tuiti

暑さは あれば 風も 凪れて

kwe:busawa tʃassa jertig kwe:wa

食いたければ いくらでも 食え

接続形

sar:ta kwati n:riwa

砂糖 食べて 見なさい

kuraku nati tʃi: 暗く なって 来て

?o:e: tʃi: makiti natʃaŋ

喧嘩して 負けて 泣いた

keti ndʒi nimbisa

帰って行って 寝るよ

ja: idʒi kwa: 家 行って 来い

taki ʔudug ?utʃa:tʃi 丈 程も つりあって

以下に漢那方言の特徴的な音韻対応の幾つかをあげる。語例の右側のカッコ内は比較をする那覇方言等である。

1, 破擦音の摩擦音化

1-1, tʃi (←「つ」) →su

sukati <使って> (tʃikati)

sukag <着かん> (tʃikag)

sunnuku <サトイモの一種> (tʃinnuku)

tisu <一つ> (tʃitʃi)

tʃusutʃi <一か月> (tʃutʃitʃi)

tasutʃi <二か月> (tatʃitʃi)

misutʃi <三か月> (mitʃitʃi)

1-2, tʃu (←「く」「つ」等) →su

su:ŋ <来る> (tʃu:ŋ)

su:ku <来るから> (tʃu:kutu)

su:ssa: <来るよ> (tʃu:ssa)

su:saja: <来るね> (tʃu:saja:)

su: <今日> (tʃu:)

sukoju: <作る> (tʃukuiru)

1-3, tʃi (←「き」「ち」) →ʃi

ʃinu <着物> (tʃiŋ)

ʃitʃi <着て> (tʃitʃi)

ʃiki <聞き> (tʃitʃi)

ʃi:nija <su:nija とも。来たら> (tʃi:ne:)

ʃi:mu: <肝> (tʃimu)

ʃitʃibi <帯> (キキオビに当たる)

ʃikasag <近い> (tʃikasag)

ʃi: <血> (tʃi:)

2, r 音の弱化

2-1, ra→ja

sugujattag <殴られた> (sugurattag)

sugujatti <殴られて> (suguratti)

kujattag <咬まれた> (kurattag)

najag <ならぬ> (narag)

sumija <すむら> (ʃimura, ガの結び形)

idʒaja <行ったら> (?ndʒara, ク)

2-2, ra→: (ただしa)

ka:dʒu <頭, 髪> (karadʒi)

wa:bi <童> (warabi)

ka: <から, 格助詞> (-kara)

ja:sug <やる> (jarasug に当たる)

ja:tʃag <やった> (jaratʃag に当たる)

na:ʃiwa <習わせ> (nara:ʃe:)

ta:ʃi <とらせ> (turaʃi)

wa:igaja: <笑うかな> (waraigaja:)

ka:toŋ <飼っている> (karato:ŋ)

ura→ua→wa となったもの

wag <居ない> (urag)

2-3, ru→: (ただしu)

u: <居る> (uru. ゴの結び形)

su: <する> (suru. ク)

idʒau <行った> (?ndʒaru. ク)

tʃau <した> (saru. ゴの結び形)

音声環境により ru が脱落した例

?utusatanu <恐ろしくて> (?uturusatanu)

音声環境により ru が :(a) になる例

da:sanu <だるくて> (rarusanu)

ʔa: hadzu <あるはず> (ʔaru hadzi)

2-4, ri→i

ʔai <あれ> (ʔari)

tuiti <凧れて> (turiti)

kataijo: <語れよ> (katarijo:)

dʒui <どれ> (dʒuri)

uri→ui→wi: となったもの

wi: <それ> (ʔuri)

1と2の結果

sa:sag <美しい> (tʃurasag)

sa: <顔> (tʃira)

という独特な形が出てきた。

3, ʃi→su

suminna: <させるか> (ʃimi:nna:)

sumiwa <させろ> (ʃimire:)

sumija <させよう> (ʃimira)

suga: <だが, 接続助詞> (ʃiga)

ko:isu <買うの> (ko:ʃi)

kʔwe:sutu <食うのと> (kwaifitu)

magisasu <大きいの> (magisaʃi)

準連体形につく接尾辞 su は naiʃija <出来るのは> のように ʃi の場合もある。

4, tu→:, φ

ku: <から> (kutu)

natakʔu: <なったから> (natakutu)

mitaku <思ったから> (umutakutu)

su:ku <するから> (sukutu)

5, nu→φ

mu <物> (munu)

mu <のに, 接続助詞> (munnu)

6, bu→φ

kwe:sanu <食いたくて> (kwaibusanu)

7, p 音

pi:dʒa <山羊> (ʔi:dʒa:)

pu:me: <おじいさん> (類似形なし)

ハ行音を h で発音することが多いが, 稀に上記のように p 音を有する語がある。

8, glottal stop

ju: <魚> (今帰仁方言で ʔju:)

ja: <お前> (ʔja:)

wa: <豚> (ʔwa:)

wi: <上> (ʔwi:)

witeŋ <植えてある> (ʔwite:ŋ)

ndʒiŋ <出る> (ʔndʒi:ŋ)

ndʒe:sa <行ってある> (ʔndʒe:sa)

沖縄方言で一般的なグロタルストップが上記語等でみられない。

1972年8月に概観を試みた。少し詳しく調査したいと思いつながりながら13年も過ぎてしまった。

今回の調査で明治生れの若干名の男性にまず当たって, その言語が沖縄共通方言化されているのに驚きを禁じ得なかった。以前の調査は大正末期の女性からの調査ではあったが, いろいろと興味ある現象があった。短期間にこんなにも変わってしまうものかと思いついて, ともかく明治生まれの女性を探した。探しあぐねて, これでおしまいになろうと思いついて訪ねたのが仲本ツネさんだった。ツネさんにお会いしなければ, この報告書は出来なかったに違いないだろうから, 本当に有難かった。

前の調査のときも今度の場合も, 沢山の漢那の人から「漢那の方言はきたない」というのを聞いた。自分自身の言葉をこのように決めつけるのは, とても珍しいことだ。この意識が出てくる具体的な根拠は, 上記音韻対応のところを取り上げた現象のようなものなのであろう。それにしても, この意識は漢那方

言にとって悲しいことに違いない。おじいさん達の言葉が中南部方言化されて来ているように、他の地域より消滅のスピードを早めるだろうからである。戦争のときは中南部の避難民が入りこんで来て、漢那部落の人は見えなくらいだったというツネさんの話も印象に残っている。短期間のことだから言語変化の直接要因にはならないだろうが、他地域と比較することになったのだから、これも遠因にはなっているのかもしれない。

次にいくらかの単語をあげておく。文例の中に出ているものと重複する場合もある。

ʔa:he:wa: 母豚

u:wa: おす豚

ʔattʃa:wa: 種豚

ai あれ

kwi: これ

akerdʒu: とんぼ

apobu オニヤンマ

ʔasasa: 蟬 (総称)

matʃu:ʔasasa: ジーといって鳴く蟬

ʔaʔiru あひる

ʔamma: お母さん

su: お父さん

ʔi:bi 指

ʔuʔuʔi:bi 親指

tʃusaʃiʔi:bi 人差し指

nakaʔi:bi 中指

na:ʃi:bi 薬指

ʔi:biggwa: 小指

(ʔ)ikiga 男

(ʔ)inagu 女

ʔitʃa 鳥賊

ʔitʃikuta: 従兄弟達

ʔibi 海のえび。田のえびは tanaga: という

ʔinnu 犬

ʔuʔuttʃu 大人

umbe: からむし。山羊のよく食う草

jerja: 鎌。最近は ʔirana という

o:ru 黄色。熟れたパパイヤの実の色も o:ru

ka:dʒu 頭。髪。多くの方言で karadʒi とは

髪のことであって頭は指さない。「東風の吹

けばみからづの痛みゆり さんか珍しややだ

ぬもならぬ」という琉歌があるから昔は

karadʒi で頭も表したことになる。漢那の例

は古い用法である。

gani 蟹

kamada: 平民の童名

kamade: 士族の童名

kamadu: 〃

ki: 毛

kunda: こらむ

kubufimi コブシメ

geta バッタ

ma:ge:ta トノサマバッタ

kweŋ 食べる。今は kamug というようである。

tʃa:giwa 召し上がれ

sa: 顔。面の変化した形

sa:sag 美しい

ʃi: 血

ʃi: 乳

tʃi:nu kubi 乳首

ʃi:ba 牙

ʃikig 水に浸ける

ʃigutu dʒo:dʒu 仕事上手

ʃiʃi: 肉

ʃig 着る

sutʃi:ma: 昔の文字。スーチューマーのこと

su:ŋ 来る
 sukajuŋ 使う
 susu 煤
 sudasag 涼しい
 subi 尻。つべ
 suhatʃiga:sa ツワブキ
 sumi 爪
 sunʃi 膝。
 ʃensu 三味線
 ʃensu ʧiki dʒo:dzu: 三味線弾き上手
 taku: 蛸
 ti: 手
 timbja: 掌
 tu:sag 遠い
 tui 鶏
 tuggwe: 鋏
 ti:su 一つ
 ta:su 二つ
 mi:tʃu 三つ
 ju:tʃu 四つ
 ʔitʃutʃu: 五つ
 mu:tʃu 六つ
 nanatʃu: 七つ
 ja:tʃu 八つ
 kukunutʃu: 九つ
 tu: 十
 tʃa: 茶
 tʃa:nu kwitʃu 茶うけ
 sakinu kwitʃu 酒の肴
 tʃaΦubo: (tʃaho とも) 一日中畑で働くこと。
 この場合の bo: は畑のことという
 tʃaŋ した。やった
 tʃikasag 近い
 tʃigga: 井戸
 dʒi:tʃa 雀

o:dʒi:tʃa 目白
 kʔwa:dʒi:tʃa セッカ
 この種の小鳥を dʒi:tʃa として取らえてい
 ることになる。
 ʃi:ku ひよどり
 ku:kau 赤しょうびん。昔は庭先にまで飛ん
 で来たという。この鳥が鳴くと海の小魚が
 ちるとのこと
 tʃusutʃi 一か月
 tasutʃi 二か月
 misutʃi 三か月
 jusutʃi 四か月
 ʔitsusutʃi 五か月
 musutʃi 六か月
 nanasutʃi 七か月
 ja:sutʃi 八か月
 dʒo: 門
 tʃo:ʃi 一食
 na:mi あなた
 na:ʃina: あなたがた
 nitʃi: 熱
 nidʒi: 右
 ʧidʒai 左
 nihe:etasa: ありがとうよ (同等, 目下)
 nihe:e:bitanro: ありがとうございましたよ
 (目上)。誰の子かという場合。小さい子
 は ta: kwa: jegga というが、大きい子の場
 合は ta: jan tʃu: jegga という。後者は敬意
 があるらしい。
 ninto:tʔag 寝ていた
 numiu: 飲んでいる
 tʃa:giu: 召し上がっている
 ha:beru 蝶
 ha:me: おばあさん
 pu:me: おじいさん (平民)

?usume: おじいさん (士族)
 hataki 畑。大小、場所にかかわらず、総て
 そういふ
 çisa 足
 çidzi ひげ
 çiramakimunu: なまけ者
 Φudumagi: 背の高い者
 ça: 農具のへら
 masaj おいしい
 mi:g 生える
 mitfi 道
 midzu 水
 mihaki 朝食
 fitimitimug 昼食
 jubag 夕食
 mu: いも
 jamamu: 山いも
 ta:mu: 田いも
 sunnuku 八つ頭
 me:bitfisug 結婚する
 ja: 君, お前
 ?i: 君ら。お前ら。宜野座の方では ?igaru:
 ということ
 ja:sug やる
 ja:dziba: ヤモリ
 kifidzokkwe: 木登りトカゲ。キセルのやに
 を食わして遊んだのでこういう名称らしい
 dzundzummikaki アオカナヘビ
 anrakwe:bo:dza: トカゲ
 rufi 友
 wanu 私
 wanaja: 私達
 ?wi:rikisag おもしろい
 n:na 貝
 ndzu 尾

?ufinu ndzu 牛の尾
 ?innu ndzu 犬の尾
 助詞を伴わない文例
 ?aga he:kuna: tfe:u:
 かくも 早く 来てある
 ?aga he:kuna: tfe:g
 かくも 早く 来てある
 ?antfi ?wa:baigutu jumunu k?utfi
 かくも 余計な事 言う 口
 kwe:sanu Φufigarag
 食いたくて たまらない
 nu:jag kwitjan su:tag
 なんの かの していた
 çi:saru e:ka: Φuju 寒い 間は 冬
 ?anda:gi: ?agifinde: kwa:ti nen natotag
 てんぷら あげ次第 食ってなくなっていた